

本書を用いて語彙指導をなさる先生方へ

本書は、日本語能力試験 N5 水準の単語およびその組み合わせ（コロケーション）において、その繋がりや意味が、教科書に出てくるそれらとは異なるもの・逸脱しているものを学ぶための教材です。

初級を教える日本語教師の多くは、インプットとしての文型や例文の導入、アウトプットとしてのドリルや教室活動などに授業時間がとられてしまい、十分な語彙の学習にはなかなか手が回りかねることを実感しているはずです。まして多義語の意味や、熟語や連語となると「このままの形で覚えておくように」程度の説明で終わらせてしまうケースが多いのではないのでしょうか。

また学習者側も、初級語彙をより深く学ぼうとしない傾向があります。学習者の多くは、JLPTをはじめとする各種試験の合格を目標にしますので、中上級の漢語学習に重きを置き、また多くの語を効率的に覚えようとして、単語一語につき一つの定義、いわば「一語一義」で覚えてしまおうという傾向があります。

しかし実際は、初級の語彙の多くは中上級の語彙と比べて、よりバラエティに富んだ、高頻度で用いられるものが少なくありません。

たとえば動詞「かぶる」は初級前半で「(ズボンを) はく」「(ネクタイを) つける」など着脱をしめす動詞と共に導入されるのが普通です。しかし現代の口語では「スケジュールがかぶった」のように、予定や所持品の重複をあらわす使い方が多くなっています。

つまり「かぶる」は教科書で教える、現代語としての標準的な意味（＝中心義）以外に 2 番目の意味を持つ、多義語となっています。初級後半以上の運用力を持つ学習者にとって「かぶる」は既に学習した語ですから、この新たな意味（＝派生義）を学ぶ機会があれば、学習者の語彙知識がひとつ豊かになります。

そういった語群を、本書では、「既に知っている 1 語により豊かな意味が加わる」ことになぞらえて、「イチゴリッチ」と名づけました。

次に、易しい語どうしの複合語が、予測しにくい意味を獲得するケースがあります。たとえば「水入らず」は、どちらも N5 程度の語である「水」「入る」からなりますが、意味は「内輪の人だけで、他者を交えずに」であり、「水」「入る」それぞれの意味の合成から、この語の意味を予測することはできません。言い換えれば「水入らず」は、「水」「入る」という各部分の総和以上の意味を持っていることとなります。また「水入らず」は、「水分不入」のように、類語の組み合わせで置き換えることもできません。

こういったことは、合成語のような単語のレベルだけで起きることではありません。「大きな顔

をする」「鼻が高い」といった文法ルールによる組み合わせ、つまり文のレベルでも生じることで、そういった合成語や、熟語・連語など（本書では「コロケーション」と総称します）を、本書では「語彙が簡単に増やせる」になぞらえ、「Go Easy」と名づけました。

上に挙げた2つの事例は、なぜそういった新たな意味・普通では予測が付きにくい意味を生み出すに至ったのでしょうか。それは、これらの語が高頻度で使われ、一定の語同士が高頻度で組み合わせられていくうちに、それが自然なものとして日本語話者のコミュニティで共有されていったと考えるのが自然でしょう。実際、イチゴリッチにせよ、Go Easy にせよ、日常のやりとりで用いられる可能性は、N1、N2 相当の中上級の語彙よりも、はるかに高いのです。本書はこれらに対する気付きを学習者に与え、日本人との気軽なやり取りの中でこれらを理解し、時には使えるようになることを目標に開発いたしました。

実際の言語使用で使われる、自然な語の選択やコロケーションを重点的に指導する教授法は「レキシカル・アプローチ」と呼ばれます。本書は日本で初めて、レキシカル・アプローチの理念に基づいて開発された語彙教材です。レキシカル・アプローチはマイケル・ルイスという英語教育学者によって 1993 年に提唱され、1997 年にはその教室での実践例を示した書籍も出版されています。しかし、それらはあくまで語彙習得に重きをおいた教室活動であり、現在の日本語教育における、総合教科書を用いた教え方に代わるものではありません。

よって、教室で本書をお使いになる場合には、通常の授業に少しの時間を使い、口頭表現の指導を補完するものとして用いることをおすすめします。

指導例はダウンロードコンテンツ「Go Easy! 教室活動案のご紹介」にてお示ししていますが、本書はなるべくナマの日本語をそのまま使って学んでもらおうという「用例基盤主義」を取っておりますので、生の会話の部分を有効利用していただければと思います。また、会話部分の多くは聞いて楽しいこと、聞き取れておもしろいことを主眼に書かれています。ですので、学習者が笑ったかどうかで理解度を図ることも可能です。

本書をお使いになって、学習者が口頭で実際に使われる日本語を理解できる授業、楽しく初級の語彙を学べる授業をぜひ実践していただけることを願っております。

荒川 洋平